

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

①FD体制の整備充実

●大阪市立大学文学研究科

「国際発信力育成インターナショナルスクール」の事例

(具体的に何を実施したのか)

通常のFD活動とは別に、「大学院教育改革プログラム」は本研究科全体の教育改革であるとの自覚のもと、「国際発信力育成インターナショナルスクール」に特化したFD研修会を少なくとも年に1度開催した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

教授会ではインターナショナルスクール運営委員会事項という議題を毎回設置し、教育改革としてのインターナショナルスクール諸事業の進捗状況を報告し、周知徹底を図り、インターナショナルスクールに特化したFD研修会への参加も促した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

インターナショナルスクール集中科目が、研究科内の専攻を越えての科目であり、各教員が所属する専攻以外の大学院生を指導する機会が飛躍的に多くなった。また、インターナショナルスクール日常化プログラムとあいまって、若手研究者を含む研究者が専攻を越えて研究交流するようになった。大学院教育を念頭においたFD研修会でも、教育カリキュラム、教育方法、授業外活動等について、専攻を越えて情報を共有し、より深い議論をすることが可能となった。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

E. 学習・研究環境の改善

②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

●大阪市立大学文学研究科

「国際発信力育成インターナショナルスクール」の事例

(具体的に何を実施したのか)

インターナショナルスクール集中科目を海外発表のための1ステップと位置付け、大学院生に、集中科目での外国語による発表に向けたトレーニングプログラムを受けさせている。また、大学院共通科目としてアカデミック・コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱ(合計4単位)を新設した。外国語による論文業績を積ませるため、アカデミック・ライティングセミナーを開き、また、英語校閲にかかる費用を支援した。そして大学院生が海外で発表等を行う際にはその渡航費を支援した(補助金交付期間内の3年間にのべ32名)。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

インターナショナルスクール集中科目を1回きりのイベントに終わらせないようにし、集中科目への参加→トレーニングプログラム→集中科目での外国語による発表→提携大学における国際フォーラムでの発表→ライティングセミナー等への参加→校閲支援の利用→国際学会での発表→外国語による論文業績、というようなパスを若手研究者がたどっていけるように工夫した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

若手研究者等を海外に派遣する実績が認められ、平成21年度から、「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」の「インターナショナルスクール若手研究者等海外派遣プログラム」が採択され、3年間で39名(うちポストドク2か月以上19名)以上を派遣することになった。平成23年3月までの派遣計画が32名(うちポストドク2か月以上2名)のところ、34名(うちポストドク2か月以上4名)の派遣が決定している。若手研究者が海外で活躍したり、国際学会で発表したりするのは当然という意識が大学院生の中にも教員の中にも浸透した。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

F. その他

①大学院生・研究者等の積極的な受入・派遣等

●大阪市立大学文学研究科

「国際発信力育成インターナショナルスクール」の事例

(具体的に何を実施したのか)

インターナショナルスクール集中科目に毎年3名の外国人研究者を招聘し、英語で講義を行っていただいた。インターナショナルスクール集中講義で外国語によって発表した大学院生を中心に補助金交付期間内の3年間にのべ32名を海外に派遣し、国際学会での発表等を奨励した。また、イリノイ大学の大学院生1名をインターナショナルスクールに招聘するとともに、アメリカ、タイ、インドネシア、カナダ等に教員を派遣し、大学部局間研究交流の基盤を築いた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

インターナショナルスクール集中科目では、英語による講義に同時通訳をつけ、聴講する学生の裾野を広げた。また年に1度の講義にとどめず、「インターナショナルスクール日常化プログラム」を模索した。補助金期間終了後も研究交流ネットワークが継続していくように組織と組織の研究交流となるように工夫した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

インターナショナルスクール集中科目を通じて、外国語による授業が「あたりまえ」という環境を作った。補助金期間に試験的に行っていた「インターナショナルスクール日常化プログラム」を平成22年度に制度化(予算化)し、数時間単位の外国語による大学院生・教員向けのセミナーを年間を通して行うようにした。大学院生の派遣についてはE-②参照。イリノイ大学、タイ・チュラロンコン大学から組織として毎年講師をインターナショナルスクール集中講義に派遣していただく提携を結んだ。タイ・チュラロンコン大学、インドネシア・国立ガジャマダ大学大学院/インドネシア国立芸術大学とは、現地で毎年アカデミックフォーラムを共催し、若手を含む研究者が研究交流をしている。平成23年3月には、イリノイ大学において、招聘した同大学大学院生もスタッフとなって国際研究フォーラムを主催する。